

明恵の「禅観」研究序説

柴 崎 照 和

明恵の仏教は、その頭密融合的な性格の故に、核心を把みていていないのが現状である。この故にか、明恵についての研究の多くは伝記・歌集・夢之記等を中心として展開して、明恵の仏教を思想的に直截に解明した論文は少ない。本論致は、明恵の仏教の思想的解明という研究課題の一環として、彼の仏教の本質を形成するものは何であるかを明きらかにするものである。

伝記等を一見すれば、明恵の仏教は常に実践的求道の様相に色彩られていることを知る。では彼の仏教をして実践的なものたらしめている、その実践原理とは如何なるものなのか。それは釈尊思慕による戒定慧三学の実践であり、特に禅・観が原理的立場を占めている。このことは、周知の「明恵樹下坐禅像」(成忍筆)の坐禅の姿にみる事が出来る。また伝記にも、明恵自身が禅観を仏道の本質的なものと考えていたことを知り得る記述がある。

然恵学ノ輩ハ国ミチテ踵^{ヒキス} 継ケリトイヘトモ、定学^{ツキガク}好人世マレ

ナリ、行解ノ知識ステニカケ、証道ノ入門抛^{ヒナゲ}失ヘリ(假名行状 五十三頁)

この文によるならば、明恵は仏教の習学上、禅観を教理の習学と同等、あるいはそれ以上に重要な実践原理であると考へてゐることが知られる。この故に禅観方軌の探求・模索に向い、更にはこれによる証悟を目指した。従つて明恵の仏道における禅観方軌探求の諸様相を解明することは、正に明恵の仏教を明確に把握する第一歩と言える。この禅観方軌探求の様相は、「十八・九歳ノ比ヨリ、習学ノイトマノ隙^{ヒマ}心^{ココロ}禅門^{ぜんもん}カケ、大小乗ノ教門^{けうもん}ヨテ禅観^{ぜんくわん}方軌^{ほうき}尋ネトムラフ」(前同)の如きであつた。以下禅観方軌の探求及びその修習の諸様相を述べる。

建久元年から二年にかけて、曇摩蜜多訳『五門禅経要用法』・仏陀跋陀羅訳『達磨多羅禅経』・羅什訳『坐禅三昧経』によつて坐禅思惟する。また正治三年には、『五門禅経要用法』『坐禅三昧経』等によつて修定し、入聖の方法を模索している。今述べた所の諸経典は禅経典と言われるもので、こ

れら經典の所説の法相は、經典間において多少の相違があるものの、大旨は五停心観（五門禪）なる実践体系を説く。五停心観とは安般観（数息観）・不淨観・慈心観・因縁観・念仏観である。明恵はこの法門によって修禪し、入聖の方法を模索した。また明恵は建久二年に、羅什訳『禪法要解』二巻を書写（自筆本、花園大・今津文庫蔵）し、更にこれを披覽して心を養っている。この『禪法要解』による修禪の事蹟は、伝記等の諸資料には見られない。しかしこの經典の書写及び披覽による養心の行為は、一連の禪經典に基づく修禪に専念していたことと、相い連なる行為であったと言える。

なお後年に盛んに実修された仏光三昧観においても、禪經典の明恵の禪観修習上での重要さは失なわれていない。たとえば『秘宝蔵』巻下において、(1) 仏光三昧観に光明真言が相応するという教説の根拠を、沮渠京声訳『治禪病秘要法』巻下の、光明王勝幢陀羅尼と禪観との相応を示す経説に求めた（大正七二・九三下）。(2) 仏光三昧観の伝授を受く者は、その前行として『治禪病秘要法』巻下所説の七日間の加行法（数息観→四大五蘊無我の理などを観ずる）を修すべきとする（同九九中）。(3) 修道上における魔鬼障難の滅除の方法として、『治禪病秘要法』巻下の懺悔の法を示す（同九四上）。また『解脱門義』では、修禪をなす者は財色二欲からの離脱をなすべきとして、仏陀波利説『修禪要訣』の大乗の空法に入る説を示

す（同八三下）。しかし仏光三昧観実践に関連して、より密接なる関係を有するのは『五門禪經要用法』である。それは『冥感伝』に述べられているもので、明恵は承久二年八月七日に仏光三昧観修習によって好相を得た。この好相が同經所説の念仏三昧の境界と一致することを覚知したことによる。

次に実修されたのが真如観である。最初は建久四年で、華嚴宗興隆という公請のために東大寺に赴むいた際に実修された。次いで道英が華嚴經及び大乘起信論によって結業禪誦するという事蹟を、『華嚴經伝記』から知り得て、此の事蹟を尋ねようとして真如観を行なう。行狀ではこの真如観の内容を、大乘起信論の真如生滅二門及び随流・返流の教門による修習とする。明恵は建久六年五月七日神護寺十無尽院にて、『華嚴經伝記』を書写（自筆本、今津文庫蔵）している。二度目の真如観実修は、同年冬に紀州白上峰に隱遁している事蹟を考え併せれば、五月七日以降冬までの間のこととなる。建久六年冬に紀州白上峰に隱遁する。翌七年同所にて、十地品初地文の読誦・了解、次いで禪定修習・三昧發得によって、金師子に騎乗する文殊師利が虚空中に顯現したのを感得する。この感得は三昧發得による出来事であるが、同時に禪観修習に起因する好相の感得でもある。この禪定修習→三昧發得→文殊顯現感得において、三昧發得を惹起した禪定は何か。これについて行狀には触れていない。通常十地にお

いて修する禪定は首楞嚴三昧であり、これは般若波羅蜜を実現する強力な行法とされる。ところで『夢之記』では、無相觀の修習によつて文殊顯現の感得があったと言う。この無相觀は『解脫門義』では、第八地以前に修し、第八地ではこの觀によりて所知障中の作加行障を斷じて不増減真如を証するものとする(大正七二・七六七)。これは般若の智慧を証得する行である。従つて般若波羅蜜行を内容とする無相觀を、究尽した所に三昧發得が起つた。三昧發得とは、仏智慧の体得である。故に三昧發得を起因として、智慧を本質とする文殊師利が金師子に騎乗して虚空中に顯現するという好相の感得は、必然的に起こり得るものであった。つまり文殊顯現感得は、仏智慧体得の証である。そしてこの感得には、明恵が常に懷いていた意識(「必文殊、威神ヲ如実正智、エテ仏意源底極、聖教深旨、サクリエム事ヲノソム」『仮名行狀』十六頁)が、何等かの作用を及ぼしたと見られる。

また伝承によると、明恵はこの文殊顯現感得の際に、文殊師利から「持戒清淨印明」を授かつている。この印明について金沢文庫に所藏される数通の印信のうち、湛峯・高恵と相承された印信に次の様に記す。「上人於紀州白上峰修行某三昧令發得之、剋文殊大聖影、降松樹告上人言、末代四部弟子悉破戒不淨、若有破戒、則三昧不現、須結誦此印明、令戒本具足清淨、方修習彼三昧、即授上人了」(金沢文庫研究一

一九号・二下)。これは持戒清淨印明の結誦による持戒と、これに基ずいて禪定修習・三昧發得、更に仏智の体得を目指すことが、同印明の功用であることを示す。従つて明恵がこの印明を伝授されたことは、彼の仏道が戒定慧三学を基盤として展開しつつも、とりわけ禪觀の修習が実践の原理的なものであることを提示する。

建保三年頃から、円覺三昧(円覺經に基づく)を行じている。これには、普眼章及び弁音章の所説によるものがある。

前者には(1)同章所説の四大和合等の觀門による觀思想惟、(2)宗密『円覺經略疏註』等の同章解釈に示される「尋思如実觀乃至三重法界觀」の觀行である。後者は同じく『円覺經略疏註』等の解釈に示される「三觀二十五輪の方軌」による円覺性を觀ずる觀行である。このうち明恵が專精に行なつたのは、普眼章に依拠した円覺三昧である。すなわち(1)は『円覺經略疏註』卷下之二(大正三九・五六九下～五七〇上)の解釈を通して、『梅尾明恵上人遺訓』では「円覺經には作止任滅の四病を除くを師とせよ」(岩波文庫本二〇七頁)と説示され、『梅尾御物語』卷中では「円覺經初心頓悟離四病事」(仏金四二・二八下)として示されている如く、禪觀実修上重要な実践項目と把握していた。(2)の觀門はのちに『仏光觀法門』の觀門(仏光觀十法界觀)を構築する際の、教理的觀門的基盤となる。更に所証の面から見れば、円覺三昧を重々の觀智を

起こすものとして、華嚴の法界観や真言の字輪観と同一とする『秘宝蔵』大正七二・九二中。また同三昧の大円覚性普遍融通する義を、華嚴の六相円融十支具足、密教の六大無礙四慢不離の義と共に入我我入の義を示すものとなす（同九八中）。

次に唐代以降、円覚経と共に禅經典と目された首楞嚴経に對する明恵の對処の仕方はどうかであろうか。これを彼の著作に見れば、『光頭鈔』巻下（仏全一三・二〇五下～二〇六上）と『秘宝蔵』巻下（大正七二・九七下）に同経を引用するのみ。

この外には、明恵が首楞嚴経を積極的に用いた形蹟は見られない。しかし南北朝頃の成立とされ、それ以後世間に流布した『梅尾明恵上人伝記』には、「上人首楞嚴経を披き見給ひて、一代聖教の眼目也^{云々}」（岩波文庫本一六一頁）として、明恵が首楞嚴経を凝視していたかの如き記述がある。これは伝記の原型とされる喜海撰『明恵上人仮名行状』には見られない。恐らく南北朝以後の禅林における、明恵に対する関心が反映してなされた附加と言えよう。

承久二年六月頃、新渡の李通玄の著作（同法の行弁が將來した宋版大藏經に所収の合論・決疑論・十明論）における仏光観の文、及び彼の事蹟を見ることによって、今まで修していた円覚三昧をやめ仏光三昧にかわった。これ以後百余日の間、仏光三昧観の実修を行なっている。そしてこの実修の間に、仏光三昧観の方軌としての『仏光観法門』一卷や、仏光三昧観

を導入して実践的教理体系の構築を計った『解脱門義』二巻を撰述している。

寛喜四年一月十日、明恵は年来所求の法門は「甘露生三昧」であることを覚知する。この甘露生三昧は、『大日経』転字輪漫荼羅行品（大正一八・二二中）、一行撰『大日経疏』卷十二（大正三九・七〇八上）に説かれている。そもそも甘露生三昧の覚知は、三河法印行遍に法門を説いている間に起こった。その法門とは三科及び大乘の妙理（中道・実相・理事相即・事事円融等の法門）は、我法二空上の建立とするものである。すなわち明恵は、一切の法門を二空所顯の理として見据え、そしてこの道理を甘露生三昧と把握したのである。

従つて十八・九歳の頃から探求し続けた禅観の方軌は、明恵の仏道の進趣の過程に即して、五停心観↓真如観↓華嚴所軌の円観（『唯心観行式』等）↓円覚三昧観↓仏光三昧観という形を取り実修された。そしてこれらの実修によって求められた所証は、我法二空の体得であつた。これは晩年に至つて、甘露生三昧と把握された。明恵がこの甘露生三昧を年来所求の法門と覚知したことは、彼の禅禅修習を基軸として求めた所の証悟の、その帰着する所が密教の法門であつたことを、我々に示すものである。

ハキードワード✓ 禅観、三昧発得、甘露生三昧

（花園大学講師）